
~もうひとつの501~

通信参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜もうひとつの501〜

【Nコード】

N3685U

【作者名】

通信参謀

【あらすじ】

人類が各地でネウロイと激しい戦闘を繰り返している1943年、オラーシャ帝国を中心とする東部戦線は、1939年以来の破局を迎えようとしていた。

人類の大反攻作戦である『星』作戦の失敗により大打撃を受けた南部の戦線では、ハリコフを失陥した結果クルスクに生じた突出部にオラーシャ陸軍の六個軍、カールスラント陸軍の三個軍を中心とした連合軍主力が取り残され、包囲の危機に瀕していたのだ。危機的な状況下、ウィッチによる多国籍部隊が編成された。

彼女たちはウィッチとして、特殊な技能があつた訳ではない。

ただ、少しでも多くの戦力が必要だっただけだ。

端から期待されていた訳ではない。

それでも少女たちは、平和のために、そして自由のために武器を手に取った。

プロローグ（前書き）

タイトルの『

』は「ダローガ・

ナ・ベルリン」と読みます。

日本語に訳せば「ベルリンへの道」。

政治色がない。

明るい曲調。

単純明快な歌詞。

この三つの点から、WW2物のソ連軍軍歌の中では私が最も好きな歌です。

（私の思い込みかもしれませんが）ロシアでは知らない人はいないのではないかと思われる定番中の定番で、毎年五月九日の対独戦勝記念日には絶対に歌われます。

プロローグ

1943年7月、オラーシヤ帝国アレクサンドロフスキー近郊。草原に、一輛のSU-122突撃榴弾砲が履帯を断ち切れ、摺り込んでいた。122mm榴弾砲も、こうなると車体に固定されているために、その威力を発揮できない。

周囲には他に、九輛のSU-122が撃破されその骸を晒している。ある車輛は横倒しになっており、またある車輛はエンジンから炎を上げている。

SU-122の外にいる異形の存在は、瞬く間に二個中隊を壊滅させたのだ。

せめて機銃の一挺もあれば、最後の意地をみせてやれるが、この車輛にはそんなに気の利いた物はない。

「くっ、仕方ない、脱出するぞ！」

車長がハッチから顔を覗かせると、自分たちを異形の砲口が睨んでいた。駄目だ、脱出は間に合わない。

「クソツたれ、魔女の婆さんに呪われちまえ！」

彼には、異形に向け悪態を吐くことしかできなかった。

砲口が光る。次の瞬間には、灼熱のビームが彼の体を貫くだろう。彼は目を瞑った。

そして耳をつんざく爆発音、熱風と衝撃波が彼を襲った。金属を引き裂く音が響き渡る。

だが彼も、車内の彼の部下も、死ななかつた。

彼が目を開けると、目の前で先ほどまで圧倒的優位にあった異形が、甲高い悲鳴を上げていた。

「撃てえッ！」

後ろから、少女の声が聞こえる。

鋭い砲声が二発響き、再び異形が炸裂し、悲鳴を上げた。

だが、砲声や炸裂からも分かるが、砲は小型の物らしく、致命傷を負わせることはできない。

再び少女の声。

「突撃イッチ！」

機械の足を持つ少女たちが、着剣した軽機関銃を撃ちかけつつ、鉄轍を軋ませ突進していく。

少女たちは、白い小袖と赤い袴を身に付けている。扶桑陸軍のウイッチのようだ。服装は扶桑の民族衣装だし、軽機関銃に銃剣を付ける物好きは扶桑陸軍ぐらいだろう。

「ウイッチ、か……？」

外に出た車長に、今度はオラーシャ陸軍の制服を着た少女が近寄ってきた。やはり機械の足、陸戦用ストライカーを履いている。その階級章は少佐であることを表していた。

少女は笑みを浮かべながら、話しかけた。

「私たちはまだ腰は曲がってませんが、ご不満でしょうか？」

扶桑のウイッチたちに銃剣を突き立てられ、倒れる異形を一瞥し、車長は言った。

「訂正しますよ。魔女の嬢さんに呪われちまえ、と」

その時、外に出てきた他の乗員たちが、興奮のあまり、騒ぎながら車長に抱き付いた。

「曹長どの！ やった、やりましたよ！ 生きてますよ！！」

「生きてる！ 生きてるぞ！ ウイッチ万歳！」

車長はたまらず部下たちを払い除けた。

「やめるむさつ苦しい。抱き付くな！ 俺に抱き付いていいのはウイッチだけだ！」

思わず出てしまった本音に、他の乗員たちはさらに騒ぎ出す。

「うわっ、曹長どのそんな目でウイッチを見てたんですか！？」

「お嬢さんたち逃げなさい、俺たちが食い止めますから今のうちに！」

「お前らあ！ いい加減にしろお！！」

車長が怒鳴ると、乗員たちは逃げ散った。

「すみません、奴ら先月徴兵されたばかりで、まだ娑婆っ気が抜けてないんです、許してやってください」

苦笑しながら車長は少女に言った。

少女もそれに苦笑しながら、構いませんよ、と返した。

1939年9月、突如として人類の前に現れた侵略者。人類はそれをネウロイと名付けた。

ネウロイは当初、その圧倒的な戦力を背景に、オストマルク、カールスラント、スオムス、ガリアと、侵略の魔の手を伸ばしていった。

決死の抵抗も虚しく人類は西欧の大半を失い、ついに戦火はオライシャにまで延焼した。

唯一ネウロイに対抗可能なウィッチと呼ばれる少女たち、中でも特に優秀な少女たちを各国から集結して編成された、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』が、ブリタニア上空で必死の攻防を繰り広げているころ、オライシャでも『501』の名を冠する多国籍部隊が、人知れず誕生していた。

彼女たちは、ストライクウィッチーズのような優秀なウィッチたちではない。極論すれば敗残兵の寄せ集めであった。

これは、煤にまみれ、泥にまみれ、顧みられることもなく、それでも勝利を信じ戦い続けた少女たちの物語である……。

プロローグ（後書き）

という訳で、ひさびさのストライクウィッチーズです。

例によってオリジナルキャラクター満載で、今回は東部戦線で戦う陸戦ウィッチがメインです。

初めての長編で陸戦ウィッチを選んだのは、私が戦車好きだからです！！

どのぐらい好きかというと、戦車の装甲板に頬摺りして現役自衛官にどん引きされるぐらい好きなのです。

どうかイタいやツだとは思わないでください。
好きなものはしょうがないんです！

そもそも萌えとは何か！？

諸君等には改めて説明する必要があるまい。

しかし！

敢えて言わせてもらう。

萌えとは愛と情熱だ！！

メイドさん？

巫女さん？

それがどうした！

ツンデレか？

ヤンデレか？

それは些末な問題に過ぎない！

メガネツ娘か？

はたまたドジツ娘か？

どうでも良い！

萌えたい者は勝手に萌えれば良いのだ！

周囲は関係ない。

愛と情熱、それは即ち信念なのだ！

自らの信念に従い、自らの正義を貫くのだ！

諸君！

自らの信念を貫け！

自らの正義を貫け！

そこに萌えは存在する！！

しかし、自らの信念に従い萌える以上、諸君等、そしてもちろん私も、萌えに責任を持たなければならぬ。

我々は一度萌えた者に対し責任を有するのだ。

流行が去っても自身が萌えた者を見捨ててはならない。

それは裏切りであり、何より萌えに対する最大の侮辱だ！

そして一度萌えた者を捨てることは同時に、自身の信念を曲げ、正義を捨てることに他ならない！

私は諸君等の信念がそれほど安く陳腐な物ではないと信じる！

萌えよ、永遠たれ！！

何を叫んでるんだか。

しかしすでに複数の連載をしていて更新が滞りがちなのに、さらに新連載を始めるとは、我ながら何を考えているのか。

私の脳の処理速度では、さらに更新が滞りがちになるのは容易に予想できるのですが……。

我が家に、というか私の頭の中にスパコンが一台欲しいです。

それか連邦政府に掛け合って火星のポリテイカルAIを使うか（このネタ分かる人、たぶんかなり少ないだろうなあ）

まあ、こんな調子なんです、よろしくお願いします。

第01話 撤退行（前書き）

プロローグより約4ヶ月戻る。

第01話 撤退行

白い。1943年3月15日、もうすぐ雪解けの季節だというのに、ハリコフ北方の平原は相変わらず白雪に覆われていた。

そこを北に向け進む三人の少女たちも、白かった。白い小袖に白外衣、白を基調とした迷彩の歩行脚。外衣のフードを被ると、黒い髪も白に隠れる。ただ、黒い瞳と外衣から時々覗く、足の半ばまでを包む浅葱色の袴が、アクセントになっている。

「はあ……、はあ……」

扶桑陸軍准尉駒場智玻は、味方を求め歩いてきた。2月の『星』作戦から始まった一連の反攻作戦が失敗し、ネウロイの反撃で友軍は散り散りになってしまった。

気分が沈み、九九式軽機関銃がいつもより重く感じられる。普段は頼もしい軽機関銃の重さが、今は恨めしかった。

智玻は振り返り、二人の少女に声をかけた。九九式軽機関銃でさえこれほどなのだから、二人が持つ57mm砲はもっと重く感じられるのではないだろうか。

「哲子、恵、大丈夫？」

「あたしは大丈夫です」

「だ、大丈夫です……」

樫出哲子かしで曹長はともかく、橋本恵軍曹はしもめぐみは少し苦しそくに、57mm砲を抱え直しながら答えた。

それを見た智玻は、立ち止まった。

「この辺で一度小休止しようか」

「大丈夫でしょうか、少しでも前に進まないで、魔力を消耗しちやいませんか？」

哲子が言った。休憩中でも暖をとるためには、歩行脚を動かし続ける必要がある。どうせ魔力を消耗するなら、少しでも前に進むべ

きではないだろうか。

「仕方ないわ。ここはもう敵の勢力圏内だから、いざという時に備えて、完全に動けなくなる前に休んで体力を回復しないと」

恵は小さくため息を吐くと聞いた。

「ここって、どの辺りなんでしょうか……」

智波は地図と方位磁針を取り出し、周囲の地形と見比べた。そして三キロほど先にある川を指差しながら言った。

「たぶんポリシヨフカの近くね。あの川に沿って北東に進めば、トマロフカの近くで鉄道に当たるから、あとは線路に沿ってベルゴロドに行けるはず」

「道は長い、ですね」

「ここからトマロフカまで一五キロぐらいだし、トマロフカからベルゴロドまでは三〇キロないからのんびり移動しても、明日中には着けるわ」

「あたしは、できればこんな場所でのんびりしたくはないですけどね」

哲子はそう言いつつも腰を降ろした。なんだかんだ言って、けっこう疲れていたようだ。

続いて智波が、そして恵も腰を降ろした。

「私たち、これからどうなるんでしょうか」

「さあね。ま、とりあえずベルゴロドまでたどり着けば、どうにかなるでしょ」

恵と哲子の会話はそれきりだった。

敵勢力圏内に孤立という状況下では、休憩さえも緊張を強い、休まることはなかった。

沈黙が続いた。ハリコフで散り散りになった仲間たちは、果たして無事なのだろうか。いったい人類はどうなるのだろうか。心配ばかりが心を埋め尽くす。

沈黙のうちに三〇分ほどが過ぎた。

「そろそろ出発しましょう」

智波が言つて立ち上がった時だった。ボツ！ と彼女の左足が突然火を噴いた。

「えっ……？」

智波が驚いている間にも、黒煙が濛々と噴き出す。

「うわッ！ 恵、消せ！ 雪かけろお！」

智波が驚いて固まっている間に、叫んだのは哲子だった。

「は、はいい！」

哲子が脱いだ外衣ではたき、恵が慌てて雪を被せる。

焼け焦げた九七式中歩行脚を見て、智波は呟いてしまった。

「どうしよう……」

予定ではこの後トマロフカまで進んで大休止、翌朝から線路に沿ってベルゴロドを目指すはずで、正午前には友軍に合流できる予定だった。

火災の理由は、おそらく整備不良だ。なにしろ冬季攻勢で相当に酷使した上、今月のネウロイの攻撃が始まってから、まともな整備などしていないのだ。

そして、それは哲子や恵の九七式中歩行脚も同様だ。智波の歩行脚が故障したからには、二人の歩行脚だって故障する可能性がある。

「ど、どうしましょう……、これじゃ、動けませんよ……」

恵はうろたえたように、不安げな声を上げる。

「関係ないわ！ たかが四五キロ、自分の足で歩けばいいだけよ！」

だが智波は気丈に言い切った。いま二人に不安を見せる訳にはいかないのだ。孤立無援の現状で指揮官が弱さを見せることはできない。指揮官は常に楽観的であれ。

そこに。

ズンッ！ と地響きが轟いた。地響きは一定のリズムで近づいてくる。今まで何度も聞いたことがある。あれは、ネウロイの足音だ。足音はまっすぐ向かってくる。智波の九七式中歩行脚が上げた黒煙を、見咎めたのだろうか。

すでに捕捉されたものと考え、智波は二人に聞いた。

「弾はどのくらい残ってる!？」

「あたしは軽機が二弾倉だけ、57mmの方は弾切れです」

「私は57mm砲が一発と軽機関銃が一弾倉です」

哲子と恵の答えは、心許ない数字だった。

智波の九九式軽機関銃は、すでに全弾撃ち尽くしている。身軽にするために57mm砲は装備していない。

とてもではないが、ネウロイに対抗できる量ではない。

智波は小さくため息を吐くと、先祖伝来の扶桑刀を抜いた。乱れ互の目を持つ白刃が光る。

「あなたたちは逃げなさい。私がここで食い止めるから」

自分がこの小隊の指揮官だ。そこには責任がある。年下の二人の少女を守る責任が。歩行脚を失った今の自分は足手まといだ。二人を助けるには、自分が残るしかない。

だが哲子も恵も一步も退かないどころか、軽機関銃に銃剣を装着した。

「そうはいきませんよ」

哲子が言えば、

「そうです！ 准尉どの一人を置いて逃げるなんて、扶桑撫子の名折れです!!」

恵も続けて言った。表情は緊張に強張っているが、その瞳からは、決意が読み取れた。もう絶対に仲間を見捨てて逃げたりはしないと、強い決意が。

智波は再びため息を吐いた。どうやら梃子でも動きそうにない。何よりもはや口論している暇はない。

「仕方ないわね、どうなっても知らないわよ!？」

「文句ありませんとも」

「やりましょう!」

三人は地面に伏せて待ち伏せの態勢を敷いた。

「いい？ まず恵は57mmで先制、そのあとは二人で軽機を使っ

て援護射撃を。その間に私が切りかかるから」

「切りかかるって」

その命令に哲子が驚いて智玻の足を見る。

「これは脱いでいくしかないわ」

裸足で雪の中を走れば凍傷になるだろうが、構ってられない。

近くの丘の向こうから、足音が迫る。

恵が57mm砲を構えた。砲弾を装填し、安全装置を外す。

やがて、ネウロイが丘の稜線から姿を見せた。六足歩行の、小型陸戦ネウロイだ。まだこちらがどこに伏せているかは、完全に把握していないらしい。

「肩の力抜いて、落ち着いてよく狙って、大丈夫、絶対に当たるから」

緊張した恵が暴発させないように、哲子が寄り添って落ち着かせる。57mm砲は装甲貫徹力が不足だ。十分に引き付けねばならない。

ネウロイが一〇〇メートルの至近距離にまで接近した瞬間。

「撃てえッ！」

智玻が叫ぶと、恵は歯を食いしばり、引き金を引いた。

その瞬間、魔力を込められた九二式徹甲弾が秒速四二〇メートルで飛び出す。

砲弾はネウロイの胴体に命中した。弾かれることなくうまく炸裂したが、しかし装甲を破るには至らなかった。

「援護射撃！」

勢い良く歩行脚を脱ぎ捨てた智玻が、大和守安定の作という代々伝わる愛刀を構えながら、雪原を突っ走った。

寒冷地仕様の踝まで覆う浅葱色の袴の下で、素足が直に雪を蹴る。智玻は痛みを感じたが、すぐに感覚がなくなった。

ネウロイは近づく智玻を撃つべきか、軽機関銃を撃ちかける哲子と恵を撃つべきか、悩んだようだ。

智玻はその一瞬の隙を衝いた。裂帛の気合いと共にネウロイの足

の一本に切りかかった。大和守安定の細く繊細な刀身が、ネウロイの足に食い込む。わがままで扱いが難しい刀だが、しかし切れ味は抜群だ。

ついに足の一本を切り落とした。銀色の破片と共に巨大な足が地面に倒れ、砕け散る。

「次は!？」

さらに次撃を繰り出すべく、ネウロイを見上げる。

が、その瞬間、強烈な衝撃が智玻の体を襲った。彼女をネウロイが蹴ったのだ。

懐に飛び込めば攻撃できまいと思ったのが、失敗だった。肺の空気が一気に抜ける。うめき声すら出ない。雪の冷たい感覚が頬に触れる。体に力が入らない。

薄れゆく意識の中で智玻が最後に聞いたのは、哲子と恵の悲鳴だった。

第01話 撤退行（後書き）

袴が踝まであるのは寒冷地仕様と書きましたが、実は私が丈の短い袴という物の存在を認めたくないからです。

メイド服のスカートも巫女装束の袴も、振袖も浴衣も、基本的にミニは禁止！

はっきり言うならスカート全般についてもミニはこれを認めず。最大限譲歩しても膝丈が限界です。

若い女が足を過度に露出するのは、娼婦じゃあるまいしはしたないと思いますよ（ウィッチはズボンですしストライカーを装備すれば足が隠れるので基本的に問題なし。ただしスカートや袴を着用するなら膝丈より下！）。

戦闘場面の描写はどうすればいいか、いまいち分かりませんね。

そういえば日本陸軍の戦車は女人禁制でしたが、扶桑陸軍の戦車はどうなんだろう？

ウィッチと共同作戦するならいざという時、乗れた方が便利そうですが。

ご意見ご感想お待ちしております。

第02話 プロホロフカの悲報

暖かい。毛布を被っているようだ。下にはふかふかとは言い難いが、それなりに柔らかい布団も敷いてある。

周りからは、何人かの話し声も聞こえる。哲子や恵の声じゃない、誰だろうか。

どうでもいい。疲れが溜まっていた。何日も休みなしで戦っていたのだ。このままもうしばらく寝ていたい。

しかし、毛布はともかく、布団はどこから出てきたのだろうか。ハリコフから撤退し、ポリシヨフカ辺りでネウロイと遭遇戦になっただけだが、その後の記憶がない。

そうだ、戦いはどうなったのだろうか。

そこまで思い至った智玻は、叫びながら跳ね起きた。

「哲子！ 恵！」

その瞬間、ゴソッ！ と凄まじい衝突音。智玻の額に衝撃と痛みが走る。一人の少女が簡易ベッドの横から、智玻の顔を覗き込んでいたのだ。

智玻はそのまま簡易ベッドに倒れ込み、少女も簡易ベッドの脇にうずくまる。ものすごい音に、周囲の軍医や衛生兵、傷病兵が驚いて二人に注目する。

二人はしばらくの間、額を押さえていたが、やがて少女は頭突きで赤くなった額をさすりながら立ち上がり、半ば涙目で聞いた。

「うう、大丈夫？」

「私は大丈夫、です。あなたは？」

「大丈夫、ちよつと驚いちゃったけど」

智玻は改めて周囲を見回した。目の前にはカールスラント陸軍士官の軍服を着て、赤みがかかった茶髪を肩の辺りで揃えた、活発そうな雰囲気のある少女。

今二人がいるのは、大きめのテントの中だ。簡易ベッドが並び、その間を縫って軍医や衛生兵が忙しなく動き回っている。ストーブに火が入っていて、暖かい。

「ここは、どこなんですか？」

「プロホロフカに設営された野戦病院よ」

「あなたは？」

「私はカールスラント陸軍第501重歩行脚大隊のイルゼ・イエニ
ー・ベルンシュタイン少尉、あなたは？」

相手の方が階級が上だ。智玻は慌てて毛布を払いのけ、立ち上がった。

「駒場 智玻准尉、扶桑皇国陸軍欧州派遣撃四二九部隊第5中隊！」

「えーっと、楽にしていよいよ。それと……、とりあえずこれ、かけた方がいいんじゃないかな」

イルゼは落ちた毛布を拾うと、恥ずかしそうに差し出した。

「え？」

なぜ恥ずかしそうにしているのだろう。そういえば周りがさつき以上に驚いている。驚いて固まっている者もいれば、慌てて視線を逸らす者もいる。

なぜか体がスースーする。

「ごめん、手当てするのに脱がす必要があったから」

イルゼの言葉に智玻が視線を下に落とすと、自分の素肌が見えた。智玻は服を着ていなかった。

「えーっと、それで扶桑陸軍欧州派遣撃四二九部隊っていうと……」
慌てて奪った毛布で体を包んだ智玻は、未だに真っ赤な顔で、イルゼの質問に答えた。

「歩行脚第7連隊です」

「ああ、あそこ」

イルゼは小脇に抱えた書類をめくっていく。やがて手を止めると、表情が曇った。

「あの、どうしたんですか？ 部隊は、他のみんなは無事なんですか！？ ベルゴロドで合流する予定だったんです！」

不安げに聞く智波に、イルゼは気の毒そうに言った。

「連隊長の前田中佐は戦死が確認されています。第5中隊は高木大尉以下、あなたたちを除いた全員が行方不明に」

「そんな……」

ネウロイの勢力圏内で行方不明となることが何を意味しているのか、言うまでもない。今まで苦しいときも楽しいときも一緒に戦ってきた戦友たちが……。

ベルゴロドで会おうと約束していたのに、もうその約束を果たすことはできないのだ。

だがそれでも、イルゼは『あなたたち』と言った。

智波は掴みかからんばかりの勢いで、イルゼに聞いた。

「哲子と恵は！？ 私と一緒にいた二人は無事なんですか！？」

「落ち着いて、落ち着いて。二人とも私の部隊で元気になっているから、安心して」

それを聞き、智波は思わず簡易ベッドにへたり込んだ。

「大丈夫？」

「……大丈夫です。安心したら、力が抜けちゃって……」

「そう、落ち着いたら大隊に案内するよ。早く二人を安心させてあげて」

智波は小さく頷いた。

五分ほどして、智波は野戦病院を引き払い、イルゼの案内で第501重歩行脚大隊に向かった。

「重歩行脚大隊って言っても、今ある戦力は三号歩行脚H型が四輛だけなんだけど。部隊名はほとんど詐欺だよ、リベリオン人が相手なら裁判沙汰かな」

イルゼは笑いながら言った。

「ま、補給中隊は無事だし、三号歩行脚を核に何とか再建できる

と思う、って言うか絶対に再建するつもりだけどね」

「前向きですね」

「1939年よりはマシだからね。」

今のストライカーの形式が実用化されたのは、1937年でしょ？ 大戦初期の頃は実戦型の生産が間に合わなくて、訓練用の一号や二号まで駆り出して戦ったんだから。しっかりした歩行脚があるだけマシだよ」

「そういえば、さっき三号歩行脚しかないと言いましたが、六号歩行脚はどうしたんですか？」

重歩行脚大隊なら、六号歩行脚を持っているはずではないか。性的にはむしろ、そちらの方が残っていそうである。

「ああ、ティーゲルね、撤退中に故障して邪魔だったから、みんな捨ててきちゃった」

「あんなに強力な歩行脚が。なんか、もったいないですね」

「あなたもそうだけど、みんな歩行脚を酷使しすぎなんだよねえ。機械にはもっと愛情を持って接しないと」

大隊に着くと、接收したアパートを使用していた。アパートは宿舎や事務所とし、アパート前には天幕が張られ、車輛や歩行脚が並んだ作業場となっている。

車輛や歩行脚を整備する者、武器の保守点検をする者、馬に飼い葉を与えている者……。大きな敗北の後にしては、活気がある。

「リリー、リリー・エックホーク軍曹」

イルゼが呼ぶと、馬に飼い葉を与えていたウィッチが返事をして、二人のもとにやってきた。明るい金髪を背中の中ほどまで伸ばした少女だ。

「なんででしょうか？」

「駒場准尉を櫛出曹長たちのところに、案内してあげて。」

私は片付けなきゃいけない書類があるから」

「分かりました」

リリーは返事をし、イルゼはアパートの中に入っていった。

「初めまして、リリー・エックホーク軍曹です。よろしく願います、准尉どの！」

リリーは智玻の方に向き直ると、敬礼しながら挨拶した。はきはきした気持ちのいい挨拶だ。

飼い葉を全てあげ終えてから、リリーは智玻を中に案内した。

哲子と恵の部屋に着くと、中から少女の泣き声と励ますが聞こえた。

リリーはドアをノックすると、

「樫出曹長どの！ エックホーク軍曹であります、入室許可を！」

「どうぞ」

智玻が部屋に入ると、咽び泣く恵とそれをなだめる哲子がいた。

「あつ……」

智玻に気付いた恵が、顔を上げる。そして智玻に抱き付いた。

「准尉どのおッ！」

恵は智玻の胸に顔を押し付け、思い切り泣きじゃくった。

「中隊長があッ！ 連隊長もッ！」

戦場に身を置いてるとはいつても、恵はまだ一三歳だ。余りに多くの仲間たちの一度の死を、受け止めきれないのだ。

「みんなッ、もう……、う、うう……」

止めどなく流れる恵の涙が智玻の服を濡らす。

智玻は恵を抱き締め、優しく撫でた。

「哲子、恵、あなたたちだけでも、無事でよかった」

「准尉どのもご無事で」

哲子は安堵したような声を返した。

「哲子、心配かけちゃったかな。今まで恵の面倒を見てくれて、ありがとう」

「准尉どのまでいなくなったら、私たちは……」

恵の泣きながら、不安げな瞳を智玻に向けた。

「ごめんね、心配かけちゃって。」

大丈夫、私は絶対にあなたたちを見捨てたりしないから」

そして堪えきれなくなつた哲子も、智波に抱き付いた。三人は互いを強く抱き締め、そこに仲間がいることを確かめ合った。

「いい話ねえ」

「あ、少尉どの」

不意に背中からかかった声にリリーが振り返ると、部屋の入り口にイルゼが立っていた。

様子を見にきたイルゼは、部屋の入り口から抱き合う三人を見て、目を細めていた。

イルゼは思う。正直、自分たちは敗北や死に慣れすぎている。仲間の死を心から悲しめる三人が羨ましい。

今は戦時だ、死は普遍的な物である。悲しむべき要素ではない。死を悲しむことは軍人にとって軟弱な考えなのだろう。

しかし、平和になつた時、本当に必要な価値観は死を悲しめる、軍人失格の価値観ではないだろうか。

イルゼは不安にかられた。平和がいつまでも続かないように、戦争もいつまでも続く物ではない。その時、自分は死を悲しめるようになれるだろうか……。

第02話 プロホロフカの悲報（後書き）

このあいだ、WW2当時のソ連軍の記録映画を見たのですが、相変わらず物量に圧倒されました。

羨ましい。

それに比べ、我らが日本軍は……。

はあ、日本軍も地平線の先まで重砲並べて百基数ぐらいまとめてぶっ放すことができたらなあ。

もうソ連軍には苦し紛れに悪態つくしかありません。

「なんてブルジョワ的な戦い方をしてるんだ！ こんな贅沢な戦いをする軍隊は人民の敵だ！！ 万国の労働者諸君、今こそ立ち上がるのだ！！」

それと少し解説しますが、我々の世界におけるドイツ軍の初代第501重戦車大隊は、1942年11月に北アフリカに投入され、翌年5月に連合軍に降伏しました。

初代のうち東部戦線に投入されたのは第3中隊のみで、編成は1943年3月、グロスドイツチュラント装甲擲弾兵師団に配属されたのも6月になってからでした。

作品内では第501重歩行脚大隊として、北アフリカではなく東部戦線に投入されたという設定にしました。

501JFWに合わせたかったので。

第03話 北から南へ

南方の大敗北は連合軍に大きな衝撃を与えた。

クルスクが陥落しヴォロネジ正面の主力が壊滅すれば、モスクワは無防備な側面を敵に曝すことになる。モスクワ失陥、さらにロストフ回廊を失いオラーシャ本国と中東が分断されるという、1939年から1941年にかけての悪夢が、再現されようとしていた。

ヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・ジユガシヴィリ首相はクルスクの死守を命じ、突出部の要塞化が決定された。

カールスラント語で城塞を意味する『ツイタデル』の名が与えられたクルスクの要塞化及び防衛作戦は、全世界の耳目を集めていた。

イリーナ・ニコラエヴナ・ヴァトウーチナ少佐は、サンクトペテルブルグにいた。

つい最近まで激しい戦いが繰り広げられていたため、『北のヴェネツィア』と称えられた運河が縦横に走る美しい街並みも、今は半ば廃墟となっている。

イリーナは中心部から自動車で南に一時間ほどのツァールスコエ・セローにある、アレクサンドル宮殿に向かった。現在はこの方面の連合軍司令部となっている、広く美しい庭園を持つ、小振りだが瀟洒な宮殿だ。

ビクトリア調の内装を持つ、オラーシャにおいては少々異質な宮殿の一室、サンクトペテルブルグ正面軍司令部。

サンクトペテルブルグ正面軍の他、ヴォルホフ正面軍、サンクトペテルブルグ方面の連合軍の統合司令部となっている部屋は、人でごった返していた。何しろサンクトペテルブルグ正面軍の地上部隊だけでも三個作戦集団、三個軍集団、合計二〇個軍という大所帯だ。さらに四個航空軍、バルト艦隊があり、そこにヴォルホフ正面軍と

連合軍が加わるから、統合司令部はどうしても肥大化してしまう。

その様子を見て、イリーナは思った。こんなに大勢が使用するなら、いつそ冬宮のニコライホールにでも統合司令部を置けばいいのに。あそこは狙撃兵一個連隊ぐらいは入れそうな広さだし、冬宮自体が市内にあるから、こんな街の外れにある宮殿よりはるかに便利なのに。

それにしても、いつにも増して激しい喧騒は、収まる所を知らない。

この数日、オラーシャ軍は大混乱に陥っていた。ジュガシヴィリ首相がクルスク防衛を命じたが、失敗した際にはモスクワは放棄か死守か、上層部ではすでに侃々諤々の議論となっている。

モスクワが無防備な側面を衝かれれば、防ぎきれない。モスクワ正面の部隊は三方から大きく包囲され、スオムス方面に圧迫される。それは東部戦線の崩壊を意味する。

しかし、人類はウクライナの泥將軍のおかげで4月いっぱい執り猶予を得た。もし泥將軍の参陣があと半月遅れていたなら、ヴォロネジ正面軍は消滅していただろう。普段は辟易していた祖国の道路事情に、感謝しなくてはならない。結局、オラーシャ軍が母なる祖国を救ったのではなく、母なる祖国がオラーシャ軍を救ったのだ。混雑の中、イリーナは部屋の奥に分け入ると、レオニード・アレクサンドロヴィチ・ゴヴオロフ中将に正対し敬礼しながら申告した。「ヴァトウーチナ少佐はゴヴオロフ中将閣下に要件があり参りました！」

「ご苦労、楽に」

ゴヴオロフ中将は、一枚の紙を差し出した。

「ヴォロネジ正面軍からの引き抜きだ、君にカールスラント陸軍第501重歩行脚大隊への赴任を命じる」

「カールスラント陸軍、ですか？」

怪訝な顔で受け取った書類を見ると、たしかにイリーナに第501重歩行脚大隊への赴任を命じるものだった。しかも大隊長として

「カールスラント軍が、その大隊を補充するのに各国に支援を仰いだそうだ。それでヴォロネジ正面軍司令官閣下は、君をご指名という訳だ」

ゴヴォロフ中將は含みを持たせた、有り体に言えば侮蔑的な笑みを浮かべた。

「まあ、閣下なら君を大事にするだろうな、何しろ君は……」

イリーナは言葉を遮った。

「関係ありません。自分はオラーシャ軍人として最善を尽くすだけです」

「ご立派なことだ。しかし君と上級大将閣下の関係は無視するには大きすぎるが……、まあいい。

ヴォロネジ正面軍の連絡機が待機しているから、すぐにクルスクに向かいたまえ。大切な人が待っているぞ」

「……失礼します」

怒りを押し殺し敬礼すると、イリーナはきつちり三動作で反転し、出口に向かった。

イリーナを乗せた連絡機はモスクワに降りた。休息と給油のためでもあるが、もう一つ、理由があった。

イリーナは連絡機を降りると、飛行場を見回した。

だが、目的の人物はいない。

「あれ？ いない？」

手元の経歴書と添付された写真を見るが、それらしい人物はいない。

第501重歩行脚大隊に赴任するウィッチと、モスクワで合流する予定だったのだが、ピストに航空ウィッチが数人いるだけで、それらしい陸戦ウィッチは見当たらない。

そこに、一人の兵士が駆け寄ってきた。

「ヴァトウーチナ少佐どのですね？」

「そうだけど、どうかしたの？」

「伝令です。列車の運行に遅延がありまして、クーベルタン中尉どのは一時間ほど、到着が遅れるとのことです」

列車の運行はクルスクへの輸送が最優先だ。その影響だろう。

一時間、時間が空いてしまった。

そこでイリーナは街中に出かけた。

モスクワには小さい頃の思い出がある。六年前に軍に入隊するまで、モスクワに住んでいた。

昔住んでいたノヴォスロヴォーツカヤ通りの辺りを歩いていると、一件の家の前に一人の男性を見つけた。あの家はたしか昔の友達の家のはず。

近づいてみると、イリーナにはその男性に見覚えがあった。もう六年も会っていないが、印象は変わらない。イリーナは彼の名前を呼んだ。

「ウラジミールさん？」 イリーナの声に男性は振り返った。その顔は、たしかにイリーナの知っている人物だ。

「君は？」

どうやら、彼はイリーナのことがかんがらないらしい。無理もない少女にとって六年の歳月は、非常に大きい。見た目で分からなくても仕方のないことだ。

「私です、イリーナ・ニコラエヴナ・ヴァトウーナです。昔、近所に住んでいた」

「イリーナ？ あつ、ひよつとしてニコラーシャの所の」

「そうです！ ニコライ・フョードロヴィチの娘の、イリーナです！」

「そうか、君が。あれからもう六年になるかな？ 立派になったものだ。昔は娘がよくお世話になったね」

「あの子は、アリックスは元気なんですか？」

イリーナがウラジミールの娘の話を出すと、彼はすぐに顔を曇らせた。

「戦争が始まって、すぐに軍に志願したよ。どこにいるかも軍機でね、今はどこでどうしているのか……」

「……そう、ですか」

戦争は、確実に人々の生活を変えているのだ。

あのアリックスが軍に志願？ イリーナには、自分がアリックスと呼んでいた年下の少女が軍に志願したという話が、信じられなかった。あの繊細で優しい少女が、硝煙漂う戦場を駆け抜ける姿は、どうしても想像できない。

「連絡は取れないんですか？」

「軍に問い合わせても機密の一点張りだね。」

私たちはノヴォニコラエフスクに避難しているけど、それも伝えられないんだ」

オラーシャは広い。一度別れた家族をなんの手がかりもなく探すのは、無謀というものだ。

「それなら、もしアリックスに会うことができたなら、私が伝えます。私もこれから前線にいくんです。ノヴォニコラエフスクですね？」

「そうだけど、頼めるかい」

「はい」

「それなら頼むよ。もし会えたなら、今はノヴォニコラエフスキー・アカデムゴロドクの科学会館にお世話になっている、家族は全員無事だと、伝えて欲しい」

イリーナは手帳にメモを取る。

「分かりました。ノヴォニコラエフスキー・アカデムゴロドクの科学会館ですね」

「そう。科学会館で音楽教育を手伝っているから、そこに連絡してくれればいい」

そこで、イリーナは疑問に思った。

「あれ？ でもなんで、ウラジミールさんはモスクワに？」

モスクワは今年の夏までネウロイの支配下にあった。一部の例外

を除いて、民間人はいない。ましてアカデムゴロドクの科学会館で音楽教育に携わっているウラジミールが、なぜモスクワにいるのだろうか。

「科学会館の仕事で、旧占領地に残されていた資料や文献を回収復元する手伝いをしていたんだ。それでついでに、ここに立ち寄ったんだよ」

まだ平和な時代、家族で揃って幸せに暮らしていた家だ。建物は朽ちていたが、そこには確実に思い出があった。

「そうだ、娘にもう一つ、伝言を頼めるかな？ 『戦争が終わったら、また家族で揃ってノヴォオスロヴォオーツカヤ通りで暮らそう』と」
「分かりました、もし会えたなら、絶対に伝えます」

「それじゃあ、私はそろそろ飛行場に行かないとならないので、イリーナは飛行場に向かおうとしたが、

「ああ、ちよつと待ってくれ」
ウラジミールに呼び止められ、振り返った。

「祝福し立ち、十字を切る……」

イリーナに近づくと、ウラジミールは静かに呪文を唱え始めた。古くから伝わる、敵弾から兵士を守る弾避けの呪いだ。

彼はイリーナの無事を祈り、言葉を紡いでいった。

「……我が言葉は堅し。鍵よ、城よ、永遠に。アーメン」
結びの言葉を終える。

「ウラジミールさん、ありがとうございます」

「君も、あまり無茶はしちゃいけないよ」

「はい、ウラジミールさんも」

「ありがとう。引き止めてしまつて悪かったね」

二人は別れ、イリーナは飛行場に、ウラジミールは仕事場の大学に向かった。

イリーナが飛行場戻ると、腰まである金髪を一本に束ねた、ガリア陸軍士官の制服を着た少女がまっていた。

「お待たせしてすみませんでした。ガリア陸軍のノエミ・クーベルタン中尉です。これから、よろしくお願いします」

ノエミの背後で、暖機運転をしていた連絡機のエンジン音が高鳴る。

「いいえ、列車が遅れたなら仕方ないわ。だいぶ予定が差し迫っているわね、急ぎましよう。詳しい話は機内で。さあ、乗って」

イリーナに急かされ、ノエミは連絡機に飛び乗った。

イリーナも乗ったのを確認し、連絡機は走り出す。

二人を乗せた連絡機は新たな戦場に向かった。

第03話 北から南へ（後書き）

所々メモや短編のネタを差し込んだり、大段落の順番を入れ替えたりしてるので、不自然な点がいくつもある……。どうもすみません。

ノヴォニコラエフスクは現在のノヴォシビルスクです。

ノヴォニコラエフスキー・アカデムゴロドクは、ノヴォシビルスキー・アカデムゴロドクです（カタカナ多い！）。

実際は（私の記憶が正しいなら）1957年に建設された町ですが、作中オラーシャでは1940年代にすでに存在している設定にしました。

科学アカデミー・シベリア部門を始め、多くの研究、教育機関があり、また研究者のためにアパート、ホテル、病院、図書館、レストラン等々、様々な施設が充実した学園都市となっています（もちろん怪しい能力開発などは行っていませんよ、多分……）。

何しろ地名からしてズバリ「アカデミーの町」ですからね。こういう場所があったからノヴォシビルスクでハイテク産業が育ったのかなー、と思わせます。

ウラジミール氏については、使いたいネタがあったので登場です。ウラジミールという名前や『ノヴォオスロヴォーツカヤ通り』等のキーワードから、推察できるかもしれませんが。

まあ、ご意見やご感想をお待ちしていますので、お気軽にどうぞ。

第04話 オボヤンへの道

3月18日、戦車第1旅団司令部がオボヤンにあるということなので、智波たち三人はそこに向かうことになった。

問題は移動手段だ。

「この地域の鉄道は復旧して、クルスクからベルゴロド向けに輸送列車が出てるでしょ。プリステニまでなら帰りの列車に便乗できるよ。そのあとは結局、道路に沿って進むことになるけど……」

イルゼの言葉に、智波は青ざめた。

オラーシャの道路事情の悪さは想像を絶する。幹線道路と言っても何もなく、轍によってようやくそこが道だと分かる程度ということも、珍しくない。

特にウクライナでは、その肥沃な黒土はオラーシャ最大の穀倉地帯として豊かな恵みをもたらす一方で、道路は短時間の雨でも泥沼同然の状態に陥る。

ましてこの時期、オラーシャは雪解けで国中が泥の中に沈むのだ。この数日で雪は溶け、すでに泥濘が広がっている。

智波たちも昨年、扶桑陸軍の機械化部隊が泥道でスタックし、兵士たちが泥まみれになりながら戦車やトラックを救い出そうとするのを、何度か見たことがあった。東部戦線に参加した連合軍の部隊は、出身国を問わず、少なくとも一度は悲惨な目に遭っている。

頼りは鉄道だが、線路沿いにしか進めないし、オラーシャの鉄道は作りが粗雑なので、あまりあてにはできない。

ネウロイすら行動不能になる泥濘だ。空でも飛べない限り、自由に動けないのだ。

「ようは接地圧が高いから沈むんでしょう？　いつそスキーでも履きますか」

そう言う哲子も、顔が引きつっている。やはり泥濘は恐ろしいの

だ。

「大丈夫ですよ、オボヤンは大事な拠点なんですから、きっと工兵が道を付けていますよ」

恵は楽観的に言った。

「そっか、恵はオラーシャの春は初めてだから、あの恐ろしさをしないんだな……」

「泥濘って、そんなに酷いんですか？」

「まあ、秋の泥濘よりはマシかな」

春先の泥濘より、秋の雪の降り始めに発生する泥濘の方が深刻だ。何しろ冬になれば大地は凍ってしまう。泥に沈んだ車輛は秋のうちに救い出さないと、凍土に埋まって救出不能になる。

扶桑陸軍の仲間と会えることを喜ぶ恵とは違い、智波と哲子の足取りは重かった。

輸送列車に便乗するために駅に行くと、見知った少女が佇んでいた。リリー・エックホーク軍曹だ。

「お待ちしておりました准尉どの」

「どうしたの？　こんなところで」

「ベルンシュタイン少尉から『三人をオボヤンまで送るように』との命令を受けています」

貨車に大隊のキューベルワーゲンが乗っているが、オボヤンまで送ってくれるそうだ。

「そう、それじゃあ、よろしくお願い」

話をしていると、四人に、機関車の方から声がかかる。

「アンタらだろ？　便乗したいってのは。さっさと出発したいから早いところ乗ってくれ」

煤で真っ黒になった機関士の声に、四人は慌てて貨車に駆け上った。

プリステニまで列車で三〇分。

そこから自動車で一時間ほど西に行けば、プシヨル川沿いの町、オボヤンである。

ここから、プロホロフカから持ってきたキューベルワーゲンで移動するのだ。

「今思ってたんですけど、プロホロフカからプシヨル川を下った方が良かったんじゃないですか？」

プリステニでの今さらながらの哲子の考えに、リリーはキューベルワーゲンに乗りながら応じた。

「これがシュビムワーゲンだったら、そうしたんですけどね」

道はオラーシャ軍の工兵が木板やカンバスで整えていてくれたが、多くの車輛が往来していたため、所々で傷んでいた。

リリーが悪路での運転に悪戦苦闘する一方、後席に座る恵は、物珍しそくに周囲の風景や構築される防御陣地を眺めていた。

二〇分かけて一〇キロほど進んだ頃。

「あ、飛行機ですよ！」

恵が無邪気に手を振る方を三人が見ると、一機の小型機がのんびり飛んでいた。どうやら連絡機らしい。どこぞの高級将校でも乗っているのだろうか。

「いいなあ、連絡機使える身分は」

悪路に悪戦苦闘するリリーは、羨ましそくにぼやいた。

「あ、向こうからもう一機きますよ」

恵は目敏く反対側からもやってきた一機を見つけた。

しかし、変ではないだろうか。向こうはネウロイの勢力圏下にある。

偵察機？ 哲子はしばらく黒点を眺めていたが、やがて様子がおかしいことに気づいた。全体が黒く、形も飛行機でも飛行脚でもない。

「あれは……、ネウロイだ！」

哲子が叫んだのとほぼ同時に、

「敵機来襲！」

近くの草むらからも叫び声上がる。

四人は考えるより先に体が動いた。キューベルワーゲンを乗り捨てて、迷わず泥の中に飛び込んだ。

周囲から、突然砲声が幾重にも重なって轟く。道路の周りに偽装網で巧みに隠蔽された高射砲陣地が、火を噴いたのだ。

時限信管によって上空で炸裂する砲弾が、ネウロイの周りに黒い染みを作る。

「小型ネウロイが単独行動？ こんな中途半端な時期に……」
空を見上げた智波は、ネウロイが一体だけということに疑問を感じた。

防御陣地の構築を妨害するために、大規模な空襲を仕掛けるといふのなら、分からないことはないが。やはり偵察か。

正直、ネウロイの行動パターンは人間と似ているようで、全く違う。その行動に意味があるのかどうかも分からない。

対空砲火は相変わらず盛んだが、通常兵器でネウロイを撃破するのは、至難の業だ。

「連絡機は！？」
すでにネウロイに気づいていて、戦闘を避けるように旋回している。

しかし砲火をかくぐつたネウロイは、追いつがっていく。

鈍重な連絡機は逃げ切れない。

「早く逃げろお！ 喰いつかれるぞー！」

智波とは道路を挟んで反対側にいる哲子が叫ぶが、陸戦ウィッチの四人には何もできない。

ネウロイが連絡機に肉迫したら、味方撃ちを恐れれば、対空砲火も沈黙するしかない。

軽快な小型ネウロイはその敏捷さを駆使し、好みの攻撃位置に占位できるだろう。連絡機に残された時間は残り少ない。

迎撃の飛行ウィッチはまだこない。

智波が何もできないもどかしさを悔しがっていると、近くにいた

恵が突然走り出した。

「ちよつと恵！ どこにいくの！？」

問いただしながらも、智玻は恵が向かう方向を見た。

泥に足を取られながら進むその先にあるのは、一門の高射砲だ。

恵の考えが、智玻にも即座に理解できた。そしてその時には智玻もすでに走っていた。

高射砲陣地にたどり着いた二人は、驚く兵士たちを無視し、高射砲に取り付いた。

「おい、お前ら……」

それを見た陣地指揮官の中尉が咎めようとするが、智玻が有無を言わせぬ口調で遮った。

「撃つ瞬間に私たちが砲弾に魔力を込めます！ だから照準をお願いします！」

必死の二人に、意図を読み取った中尉もすぐに同意した。

「……分かった、照準と信管の調定はこちらでやる。お前らはこちらの合図で魔力を込めてくれ。扱い方は、分かるな？」

「大丈夫です」

ネウロイは連絡機を狙う瞬間、直線運動に移るはずだ。中尉はその瞬間を狙った。

チャンスは一度きり。測的、上空の風向と風力、弾道の読み……、様々な要素のうちもし一つでも読み違えれば、連絡機は助からない。ネウロイが連絡機に追いつがる。

緊張が陣地を満たす。

ついにネウロイが連絡機後方に占位した。直線運動に入った。

「今だ！ 撃てえッ！」

中尉の声。

その瞬間、智玻と恵は魔力を解放した。

発砲。

砲弾は真っ直ぐ飛んでいき、真っ直ぐ飛ぶネウロイに吸い込まれた。

76mmの砲弾は外殻を破り、突進し、ついに赤く光るコアに到達した。

そして炸裂。

一撃でコアを破壊されたネウロイは崩壊した。

白い破片が花火のように飛び散るのを見て、高射砲陣地に歓声が上がった。

兵士たちが智波と恵を囲み、口々に賞賛する。

道路の反対側から駆けつけた哲子とリリーも輪に加わる。

哲子はバシバシと恵の肩を叩いた。

「やったぞ恵！ あんたはエライ！」

大勢から褒められた恵は、少し恥ずかしそうにはにかむ。嬉しそうだ。

ちょうどその頃、上空から連絡機とは違うエンジン音が響いてきた。迎撃の航空ウィッチが到着したのだ。

「遅いぞお前ら！ ネウロイは俺たちがぶっ飛ばしてやったぜ！」

一人の兵士、射撃手が空を飛ぶウィッチに向け、大声で叫んだ。

「お前はなんもやってないだろ」

旋回手が横から言うと、陣地を笑いが包んだ。

あらためてオボヤンに向かうため、四人が道路に近づいた時。

「ああッ！」

リリーが突然、前方を指差し叫んだ。

「車が……」

その指差す先を三人が見ると、ネウロイの破片に潰されたキューベルワーゲンが路肩に転がっていた。

それを見て、哲子は恵の襟を掴み、彼女の体を揺さぶりながら叫んだ。

「恵イ！ この馬鹿！ なんでネウロイなんか撃墜したんだー！」

「ええ、なんで私のせいなんですかあ！？」

「お前がこんな所でネウロイを撃墜したのが悪いんだ！」

「ヒドい！ さつきはあんなに褒めてくれたのに！」

「撃墜する場所を考えるお！」

「そんなあ〜！」

哲子を振り払った恵は涙目で逃げるが、しかし哲子も容赦せず追いかける。

しかしネウロイの撃墜には智玻も関わっているし、攻撃のタイミングを計ったのは高射砲陣地のあの中尉だ。

「あ、ちよつと……？」

智玻は二人を呼び止めようとしたが、あっさり無視された。

追いかけてつこをする二人はとりあえず置いて、リリーは智玻に聞いた。

「えつと、これからどうしましょうか」

まだオボヤンまで二〇キロあるのだ。道路はカンバスや木板で補強されているが、自動車や馬車の往来で所々痛んでいる。移動手段がないのに、どうやってオボヤンまで行くのか。

しかし智玻の答えは単純明快だった。

「問題ないわ、たかが二〇キロ、自分の足で歩けばいいだけよ！」

リリーは答えを聞き、哲子と恵を見て思った。扶桑陸軍は疲れそうな場所だ。

第05話 再会

キューベルワーゲンを破壊された後、四人は通りかかったカールスラント軍の兵員輸送馬車に乗せてもらい、予定より少し遅れてオボヤンに到着した。

扶桑陸軍戦車第一旅団司令部。そう表札が掲げられた建物は、接収した工場跡の事務所だ。工場は車輛や歩行脚など装備のための整備場となっている。旅団長室はもとも工場長が使用していた部屋である。

重見伊三雄少将は、泥だらけの智波を見るなり、笑ってしまった。「なんだいその格好は。途中で田植えでもしてきたのかね？」

智波は泥だらけのまま、まっすぐ旅団長室に向かったので、服や顔に乾いた泥がこびりついていたので。

「途中でネウロイに遭遇しまして」

「いや、冗談だ、報告は入っているよ。ネウロイを撃ち落とすとは大したものだ。スコアが撃破数に入るか、撃墜数に入るか、悩むところだが。」

まあ、無事で何よりだ。危なかったな、合流がもう少し遅かったら戦死扱いになっていたぞ」

そこで一度言葉を区切った重見少将の表情が、真剣なものになる。「我が旅団は再編のために後方に下がるのだが、済まないが君たちには留まってもらいたい」

「それは、どういうことでしょうか？」

「カールスラント軍が、第501重歩行脚大隊の補充のために、ウイッチの派遣を各国に要請しているのだ。彼らも苦しいらしいな。」

撃四二九部隊は解隊となり、現在、君たちは浮いている。そこで

済まないが、カールスラント陸軍に出向してもらうことになったのだ」

重見少将は数枚の書類を智玻に渡した。

「饒別に新しい歩行脚と、これもやろう」

重見少将が取り出したのは、新しい階級章だった。赤地に黄色の線、縁の金モールは今までの准尉のものと同じだが、そこには銀色の星が一つ輝いている。少尉の階級章だ。

「これって……」

「実は冬期攻勢中に将校団から正式に推薦があつたんだが、ネウロイの反攻で渡せなかつたんだ。本来なら任官式でもしてやりたいが、この状況だ、勘弁してくれ」

智玻は少尉候補生だった。1941年に試験に合格し、一年の教育の後、歩行脚第7連隊で実務に携わっていたのだ。

「まあ、今日はゆっくり休んで、プロホロフカには明日戻るといい」
それだけ言うと、重見少将は会話を打ち切った。三人のカールスラント陸軍出向は、すでに決定事項だった。

翌日の午後には四人はプロホロフカに戻っていた。

「で、とんぼ返りっていう訳？ 少尉どの」

出迎えたイルゼは輸送馬車から降りた智玻の真新しい階級章を見て、茶化すように言った。

「はい、これからよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくね」

智玻たちが降りたあと、馬車から荷物が降ろされていく。智玻たちが饒別に受領した一式中型歩行脚と、オラーシャ陸軍のT34歩行脚1943年型だ。他にも様々な国からの物資や装備が降ろされていく。

国際色豊かな物資を見て、智玻はイルゼに聞いた。

「原隊で各国からウィッチを派遣すると聞いたのですが、この部隊はどのような編成になるのですか？」

「今いるのは、私たちカールスラント、あなたたち扶桑、それとオラーシャのウィッチ。あとはリベリオンやブリタニアからも一個小队ずつくるらしいけど、少し遅れるから、しばらくは私たち三カ国だけになるそうよ。」

ちなみに指揮系統もグロスカールスラント装甲擲弾兵師団から外れて、オラーシャ陸軍ヴォロネジ正面軍の直轄になったわ。それで昨日あなた達が出ていったあと、オラーシャ軍から新しい大隊長が来たんだけど、今から挨拶に行く？」

「はい、そうします」

イルゼは、智破たちを連れてアパートに入ってしまった。

哲子と恵は荷物を運び込むために、途中で分かれた。

イルゼは大隊長執務室という札がかかった部屋のドアをノックし、用件を伝えた。

「大隊長どの、ベルンシュタイン少尉です。扶桑陸軍から派遣された部隊が到着しました」

「ご苦労様、入っていいわ」

「失礼します」

イルゼがまず入室し、智破たちが続く。

「あ」

智破が中を見ると、そこには知っている顔があった。長い栗色の髪を編んで纏めた、国防色のオラーシャ陸軍将校の制服に身を包んだ少女。イリーナ・ニコラエヴナ・ヴァトウーチナだ。

イリーナの白群色の瞳と智破の黒い瞳、その視線が交差する。

「チハ！」

一拍置いてイリーナが叫んだ。そして次の瞬間には智破を思いきり抱き締めていた。

「チハ！ よかった！ 負傷したって聞いて心配したんだよ！ 生きててくれた、よかった。本当によかった！！」

「ちょっと……、く、苦しい。イーラ、苦しいって……」

智波の首が締まっていることに気づいて、少女は慌てて智波を放した。

「ごめんなさい、つい取り乱しちゃって。でもベルンシュタイン少尉に聞いたけど、あなた原隊に復帰したんじゃないの？　なんでここに？」

すると、イリーナの傍らにいたガリア陸軍の少女が言った。

「大隊長、扶桑陸軍から派遣された補充の機械化歩兵です」

イリーナは手渡された書類を確認した。

「扶桑から補充があるって聞いてたけど。あなただったの？」

「ええ、私たちも昨日いきなり言われて驚いたけど。こちらは？」

「ガリア陸軍のクーベルタン中尉、今は私の副官をしてもらっているの」「初めまして、ガリア陸軍第1軽騎兵師団のノエミ・クーベルタン中尉よ」

智波はサツと敬礼した。

「扶桑陸軍戦車第2旅団、駒場少尉であります」

「プリステニの武勇伝は聞いているわ、高射砲で飛行型ネウロイを撃墜したって」

そこにイリーナが割りこんだ。

「そうそう、チハには感謝しないとって思ってたのよ」

イリーナの言葉の意味が、智波にはよく分からなかった。なぜ感謝されるのだろう。

イリーナは続けた。

「あなたが撃墜したネウロイ、連絡機を狙っていたでしょう？」

「そういえば。あ、それじゃひよっとして、あの連絡機って……」

「ええ、私たちが乗っていたの」

突然、イリーナと智波が親しそうに話し始めたので、不思議に思ったイルゼは聞いた。

「ところで、大隊長どのは駒場少尉とお知り合いなのですか？」

「ああ、それは」

智波が説明する。

「イーラは1941年から扶桑陸軍との連絡将校をしていて、それで知り合ったの」

「まあ、私はすぐにピーチエル（サンクトペテルブルグ）に異動しちゃったけど」

「会つのは一年半ぶりぐらいかな？ 私も幹部候補生になって予備士官学校に入つて、オラーシャから離れちゃったから」

そう聞いて、イリーナは改めて智波をしげしげと見た。

「士官になったの？ 下士官から士官になるなんて、すごいじゃない」

「大したことないよ。試験に受かったただだから。それに、イーラだつて大隊長でしょ？ 少佐なんて、立派になつたじゃない」

「ううん、中級将校が不足して穴埋めに昇進しただけだから、私だつて大したことないよ」

一年半ぶりとあつて、話題には事欠かない。イリーナと智波は互いに近況報告をした。

話が弾んできたころ、イリーナが思い出したように言った。

「そうだ、秘蔵のウクライナ・ウオトカがあるの、ペルバークの黒ラベルよ。今は流通が止まっているから貴重品だけど、みんなで飲みましよう。ピーチエルから持ってきたキュウリの塩漬けも、ちよつど食べようよ」

イリーナはそう言うと、行李の中からウオトカのボトルを取り出した。

どちらかと言えば、ペルバークは庶民の味だ。しかしウクライナは長い間ネウロイに占領されているため、今では手に入らないのだ。これはウクライナ・ウオトカ全般に言えることで、ペルツォフカで有名なネミーロフ・ウクライナ・ウオトカ・カンパニーの工場も、当然ながら生産を止めている。そのため、ウクライナ・ウオトカは全般的に貴重品となっているのだ。

「大隊長どの、昼間から酒盛りですか？」

イルゼは眉を顰めた。さらに、仮に飲むにしても、酒類のような

嗜好品は部隊の全員で平等に分けるべきだと言った。

「このペルバークは私物だから。それに部隊のみんなには、毎日一〇〇グラムずつ配給されるから問題ないでしょう。」

それと、思いがけず会えた命の恩人に感謝の意味もこめてね」

そういうことなら、とイルゼも引き下がった。

さっそく人数分のグラスを用意しようとするイリーナを、智玻が引き止めた。

「あ、すっかり忘れてたけど、飲む前に着任報告を」

もとはと言えば、そのために大隊長室を訪れたのだ。イリーナも手を止め、体を智玻の方に向ける。

智玻はイリーナに正対し、互いに敬礼を交わすと申告した。

「駒場少尉以下二名、現時刻を以て第501重歩行脚大隊に着任しました！ なお樫出曹長及び橋本軍曹は現在別行動！」

「ようこそ第501重歩行脚大隊に。よろしくお願ひ」

智玻はイリーナが差し出した右手を握り、握手を交わした。

第05話 再会（後書き）

皆さん、どうもお久しぶりです。

最近では本作に限らず小説の執筆更新が完全に停止していましたが、なんとか仕上げたので投稿させていただきました。

作中でイリーナが智波を「チハ」と呼んでいましたが、実はオライシャ＝ロシアとすると、厳密には「チハ」と発音している訳ではありません。

ロシア語にはh、日本語の八行にあたる発音がありません（キリル文字の「ハ」は一応「ハ」を表記しますが、正確には八行と違い、カとハが混ざったような喉の奥から出す音です。ロシア科学アカデミーが作成した公式のアルファベット転写方でも、「h」でなく「k h」です）。

（となると、サーニヤも実は「宮藤」を「ミヤフジ」と発音していたわけではない？）（でもfにあたる「ハ」はあるから問題はないか。むしろ「ハルトマン」や「バルクホルン」の発音の方が怪しい。それでもウィーンに留学していたし、ブリタニア、ロマーニヤで戦っているのだから、hも発音できるかも）

イリーナが馬に飼料を与えてたり、馬車で移動したり色々馬が目立ちます。

これにはもちろん訳があります。

ドイツ軍というと日本では「機械化された快速部隊」のイメージがあります。実際には開戦時に一〇三個師団のうち機械化できたのは一六個師団のみで他の八七個師団は徒歩歩兵部隊でした（一応、各師団で自動車九〇〇輜を確保していましたが、ドイツ軍は兵站を軽視していたため補給部隊にまで回ってきませんでした。補給、輸送は概ね馬車と鉄道が頼みで普墺戦争、普仏戦争から大して変わら

ない。ドイツ軍は各師団一二〇〇輛の馬車を用意していました。電撃戦でも当時のニュース映画を見ると馬車がかなり目立つ)。この状態は最後まで続き、軍用馬車は敗戦まで生産が続いていました。

ドイツ軍は第二次世界大戦で計二七五万頭の馬匹を動員しました。

参考までに

第一次世界大戦ではドイツ軍は一四〇万頭を動員。

ついでに第二次世界大戦でソ連軍が動員したのは三五〇万頭です(これとは別にアメリカからトラック三九万五八八三輛とガソリン二七〇万トンが提供されました。トラックは冷戦中もバリバリ現役でした……)。

作中でイリーナが秘蔵していたペルバークはウクライナ・ウオトカの銘柄です。

その中で黒ラベルは56度とウオトカにしてはアルコール度数の高い「クレプカヤ(ストロング)」です。

ちなみにペルバークの黒ラベルを出した理由は特にありません。なんとなくです。

まあ、私が普段飲んでいる銘柄はスタリーチナヤで、強いウオトカはあまり飲まないのですが。

昔からウオトカの度数は40度が最適と言われていますね。

それはそうと、日本ではフラグマンを取り扱っている店が少ないので難渋しています。

フラグマンとは『旗艦』という意味ですが、ようするに最高の物という事です。

ウオトカの消費量が年々減っているロシアですが、1998年の発売以来人気があり、あの心地よいアルコールの香りが「これぞウオトカ!」という印象を与えてくれます。

万が一、ロシアに赴く事があったなら、ぜひフレグマンを試してみ
て下さい。

後書き長いな……。

第06話 演習前段

3月22日。第501重歩行脚大隊は小隊間対抗演習を実施することとなった。

大隊は戦力の都合から中隊を中抜きし、国ごとに小隊を組んでいるのだが、各小隊の編成も装備も戦術もバラバラになっているのだ。一例を挙げれば、小隊の員数はオラーシャ陸軍と扶桑陸軍は三輛、カールスラント陸軍は四輛である。戦術としても、例えば扶桑陸軍は待ち伏せと停車射撃を重視しているのに対し、オラーシャ陸軍は走行間射撃を多用する。

そこで、各小隊の意思疎通を図り、また戦術や装備を評るために、対抗演習となったのだ。

想定戦場はプロホロフカの周囲一三キロ四方。東西はセイム川からプシヨル川まで目一杯使うわけだが、これは第501重歩行脚大隊が実際に展開する地域でもあり、その下調べの意味もある。

演習は0800時から1200時までの前段と、1300時から1700時までの後段に分かれる。

前段ではカールスラント陸軍で編成した第1小隊に大隊本部のイリーナとノエミを加えた赤軍が攻撃側、オラーシャ陸軍の第2小隊と扶桑陸軍の第3小隊を併せた青軍が防衛側となり、後段では攻守を入れ替える。

「銃口正面、控えー銃」

前日のうちに掘っておいた散兵壕の中で、智波が号令を下した。

哲子と恵が復唱しつつ47mm砲を正面に向けるのを確認し、智波はさらに新たに号令。

「射手、目標、正面のてーきー」

三人の前方、砲身の先からは、キーラ小隊ことカールスラント陸軍の第1小隊が、土煙を上げて迫ってくる。

「撃ち方ヨオイ！」

一式中歩行脚の47mm砲で三号歩行脚H型の防御を撃ち破るには、五〇〇メートルまで引きつけなければならぬ。逆に三号歩行脚H型の5cm砲は、一〇〇〇メートルから一式中歩行脚の防御を破れる。ファイナ小隊こと扶桑陸軍の第3小隊は、地形地物を最大限利用して掩蔽しつつ戦うしかない。

哲子と恵は必中を期して照準する。

次の瞬間、キーラ小隊が七五〇メートルから発砲した。

訓練用の模擬弾が散兵壕の前に着弾し、赤い塗料を撒き散らした。初弾は外したが、停車しなおも次弾を送り込んでくる。

智波たちはたまらず散兵壕の中に頭を引っ込めた。頭上を模擬弾が通過していく。

「少尉どの、キーラ小隊はあくまで遠距離戦を挑むようですよ！」
哲子の言うとおり、キーラ小隊は七五〇メートルからは距離を詰めるようとしぬい。

「隙を見て反撃するわ！ 防御を撃ち抜けなくても、オリガが突入するタイミングを作れば十分よ！」

次弾を装填する隙を衝き、ファイナ小隊が発砲する。一発は外れた。もう一発は命中したが、どちらにしる撃破はできない。ファイナ小隊の黄色い塗料がキーラ小隊の周囲に広がる。

キーラ小隊は地面に伏せ、やり過ごした。

それを見て、智波がインカムに叫ぶ。

「機動力を奪った！ オリガ！」

「了解！ オリガ小隊突入する！」

直後、オラーシャ語の突撃命令が響く。

「！」

プシヨル川の川岸、一段低くなった河原に隠れていたオラーシャ陸軍のオリガ小隊が一気に坂を駆け上がり、突進する。

「
！」
カテリーナ・イリダロヴナ・カタリニコワ少尉が叫ぶと、付き従う二人の少女が76.2mm砲を発射した。

側方からの走行間射撃に、キーラ小隊が隙を見せる。すかさず軽機関銃に持ち替えたファイーナ小隊が散兵壕を出て、躍進射撃をかけた。

二方からの攻勢に、キーラ小隊のイルゼは後退を命じた。

「いったん下がって！ 76mm砲はマズいわ！」

キーラ小隊は素早く陣形を立て直し、互いに掩護しつつ整然と後退していった。

「さすがカールスラント陸軍、やるじゃない」

ファイーナ小隊に合流したカテリーナが、その後退の手際に舌を巻いた。正直、オラーシャ陸軍の装甲歩兵では、あれほど見事な後退はできないだろう。

「一人も削れなかったのは痛いわ。それにオレーシャが見えないけど、どうする？」

智波が聞いた時だった。オリガ小隊のタチアナ・マトヴェーヴナ・クチンスカヤ軍曹が叫んだ。

「左翼に敵二輛！ オレーシャです！」

左方を見ると、T34/1943年型歩行脚を装備したイリーナと、H39軽歩行脚を装備したノエミが地平線から姿を現し、まっしぐらに進んでくる。

地平線まで約四キロ。時速一六キロで向かってくるとして、想定交戦距離を一〇〇〇メートルと仮定すれば……。智波は素早く計算する。

「あと一分で交戦するわ！ どうする！？」

さらに哲子が叫ぶ。

「キーラ小隊が反転！ 向かってくる！」

カテリーナは口元を歪めた。

「形勢逆転ってわけね。守勢鉤形陣が定石だけど、ただ……」

智波が言葉を継ぐ。

「鉤形陣には逆襲戦力が不足気味ね」

鉤形陣は敵の包囲機動の際に、旋回軸に対する逆襲を行うのが基本だ。しかし六対六のこの演習では、十分な逆襲戦力を確保できない。

「ターチャ！ レーリヤ！」

カテリーナがタッチアナとレイラ・エゴロヴナ・ミクリナ軍曹を呼んだ。

「二人でキーラ小隊を拘束！ 残りの全力でオレーシヤを撃破する！」

「正面、敵二輛！ 四輛がオレーシヤに向かいます！」

ベルタ・フレドリカ・リーチエル軍曹が言うとおり、固まっていた青軍は、二手に別れた。

青軍は有力な一部をもって赤軍の主力を拘束し、その間にオレーシヤを撃破する魂胆のようだ。

正面のオリガ分隊は突進し始めた。同時に射撃を開始し、周囲に緑の塗料を撒き散らす。

戦術的には愚手ね、だけど……。相手を見て、イルゼは内心、舌打ちした。相手はT34/1943年型だ。ファイーナ小隊の一式中歩行脚なら容易に撃破できるが、オリガ小隊となると難しい。

一方オレーシヤはさらに危機的状況だ。

ノエミの37mm砲では、正面から受け止めることができれば零距离射撃でもされない限り、一式中歩行脚でも十分持ちこたえられるのだ。

イリーナの76.2mm砲なら、一五〇メートルから一式中歩行脚の防御を破れる。しかし青軍主力にも76.2mm砲を備えたカテリーナがいる。いかにも分が悪い。

「ロジーナとベルタは残ってオリガ分隊を拘束して！ リリーは私に付いてきて！」

イルゼは指示を下すと、ロジーナ・シャツファー曹長とベルタを残し、オレーシャに合流するためにリリーを連れて転進した。

彼我距離一五〇〇メートルでイリーナとカテリーナは交戦した。お互いまだ距離は十分詰まっておらず、シールドが塗料を弾いた。その間にファイナ小隊がノエミに向け突き進む。三人はカテリーナよりさらに五〇〇メートル進み、ノエミに一〇〇〇メートルから集中砲火を浴びせかけた。

ノエミは最初から装甲防御は諦め、回避運動に専念した。しかし、次第に弾着位置は近くなり、追い詰められていく。イリーナはカテリーナにかかりきりで、掩護に手が回らない。

しかし間一髪のところ、イルゼとリリーが駆けつけ、援護射撃を開始した。

哲子と恵が反撃する。

結果として智玻とノエミの一騎打ちとなったが、お互い火器では相手の防御を撃ち破れない。智玻は相変わらず砲を装備していないのだ。

それが分かっているから、二人は肉薄した。智玻が大和守安定を抜くと同時に、ノエミもサーベルを抜いた。

「私に接近戦を挑むとは中尉どのも無謀ですね」

智玻が挑発すれば、

「あなたこそ。そんなにやられたいなら、ガリア騎兵の戦い方を見せてあげる」

ノエミも心える。ノエミも分が悪いことは分かっていた。攻撃力、防御力、機動力、その全てにおいて、H39軽歩行脚は一式中歩行脚に劣っている。

「歩行脚の性能差が戦力の決定的な差でないことを、教えてあげろわ！」

しかしノエミは一気に距離を詰め、鋭い刺突を繰り出した。

智玻は刀を使って受け流すと、反撃に移る。

斬撃をシールドで防いだノエミは一步下がり、再び刺突する。しかし智玻は素早く退き、間合いを取る。

「やるじゃない」

「中尉どのこそ」

手熟同士が真つ正面から刃を交えては、勝負はなかなか着かない。智玻は警戒を解くことなく、刀を鞘に収めた。居合いの態勢に入つたのだ。

互い隙を見せることなく、にらみ合いが続く。

動いたのは智玻だった。守りを固めるノエミに鋭い突きを繰り出した。

ノエミはとつさにシールドを張つたが、智玻の大和守安定はそれを易々と貫き、サーベルを弾いた。

智玻はさらに一步踏み込み、ノエミの喉元に切っ先を突きつけた。

「くつ、なんて鋭い剣なの!？」

シールドをも貫く刀に啞然としたノエミは、両手を挙げ、降伏の意思を示した。

智玻が改めて周囲を見渡すと、演習は大詰めに入っていた。

イリーナとカテリーナは相討ちで頭から塗料を被り、哲子と恵もキララ小隊の模擬弾をまともに食らって全身が真つ赤になっていた。イルゼとリリーは無事だが、その後方からはロジーナとベルタを破つたタチアナとレイラが迫ってくる。

イルゼたちに向き直つた智玻は、そのまま突進した。

リリーは慌ててMG42に持ち替えたが、智玻は構わず一気に振り上げ、その銃身を切り落とした。さらに驚き硬直したりリーをそのまま押し倒す。

イルゼがリリーを助けようとしたが、その隙に背後からタチアナが砲撃を浴びせる。イルゼは緑色に染められた。

「全滅かぁ」

戦線離脱中のイリーナはそれをみて呟いた。

全員のインカムに審判役の補給中隊本部が通達した。

「現在時1042時、赤軍の全滅を確認した。勝者は青軍、繰り返す、勝者は青軍」

第06話 演習前段（後書き）

思ったより早く仕上がったので投稿させていただきました。
今回は久々の戦闘場面でした。

演習ですけど……。

相変わらず戦闘の描写は下手くそです（泣）

書いておいて難ですが、少女が76・2mm砲をぶっ放しながら走り回る姿が想像できません！

歩行脚の防御の貫通距離は、あくまで戦車のカタログ・スペックを基にしているので、実戦とは少し違うと思います。

大和守安定がMG42を両断したのは、少しやり過ぎかも知れませんが、実際に日本刀が機関銃の銃身を切断した記録があるので……。
日本刀はむしろ使用者側が危ないくらいよく切れます。

それとノエミの「歩行脚の性能差が……」に対するツツコミは原則的には禁止です（笑）（わざわざ禁止というのは「ツツコミ入れろ」というのと同義ですのであしからず）

ご意見ご感想お待ちしております。

お気軽にどうぞ。

第07話 演習後段

休憩、昼食、装備の整備等を終え、第501重歩行脚大隊の面々は配置についた。後段では赤軍と青軍が前段と逆になる。キーラ小队及びオレーシャが防御、オリガ小队及びファイナ小队が攻撃である。

後段演習開始から30分、智波、哲子、恵の三人は地面に伏せたまま、青軍の防御陣地を窺っていた。三号歩行脚H型の5cm砲は、一式中歩行脚の47mm砲よりも五〇〇メートルも有効射程が長い。イリーナの76・2mm砲に至っては、うまく当てれば一五〇〇メートルから一式中歩行脚を撃破できる。真正面から攻撃すれば有効射程外から一方的に攻撃され、無用な損害を出すだけだ。

だから、オリガ小队頼みで陽攻を行い、陣地正面に敵を引きつけることが、ファイナ小队の任務である。

オリガ小队と分かれて20分。智波は腕時計で時間を確認した。迂回路を進むオリガ小队の、敵陣地側面側稜線までの迂回路の道のりは一二キロ、T34は路外速度時速四〇キロだから、そろそろ配置についている頃だ。

「目標、敵陣地正面左翼二〇〇〇メートル地点、前進開始！ 前へえ、進め！」

智波の命令で統制型一〇〇式V型一二気筒エンジンが吹き上がり、横隊を組んだ三人が一齐に前進を始めた。

ファイナ小队が、陣地前方左翼側二〇〇〇メートル地点から砲撃してきた。派手な炸裂を見ると、榴弾らしい。

壕内から双眼鏡でファイナ小队の様子を窺い、イリーナは主攻ではないと判断した。

「陽動ね、適当にあしらいましょ」

有効射程外から榴弾を派手に撃ってくるのだから、最初から撃破は考えていないのだろう。

「ロジーナ、ベルタ、二人で引きつけて」

イルゼの命令で、ロジーナとベルタは砲を構え、できるだけ派手に反撃を開始した。

残る四人は、オリガ小隊の襲撃に備える。

「迂回戦、包囲戦では主攻と助攻は距離を取るのが基本です。オリガ小隊が来るとすれば右翼でしょう」

ノエミの意見に、

「でしょうね。奇襲に備えましょ」

イリーナも同意する。主攻の行動を隠蔽するために、助攻は主攻正面から距離を置くのがセオリーだ。

ロジーナとベルタを残し、四人は交通壕を移動していった。

稜線から顔だけを出したカテリーナは、照準器を使って青軍陣地を観測していた。品質にはらつきがあり、気泡やヒビが当たり前のように入っているオラーシャ製レンズと違い、リベリオン製照準レンズはよく見える。

「さて、そろそろ行くかな」

カテリーナの合図でタチアナとレイラが歩行脚に魔力を送り込むと、エンジンが高鳴り、爆音が辺りに響く。路外最高速度で突進すれば、6分で敵陣地に突入できる。

奇襲の要点は二つ。予期されないこと、対応の時間を与えないことだ。陽動に成功した今、あとは時間との勝負である。作戦の成否はオリガ小隊の機動速度にかかっている。

赤軍側の勝ち自分たち次第。カテリーナは叫んだ。

「インペリアルスコエ・ルースカヤ・アールミイ、ウラアー！ ナ・アターク！」

「ウラアー！！」

タチアナとレイラも叫び、三人は突撃を開始した。

模擬弾の炸裂音に混じる爆音に気づいたのは、ベルタだった。

「左翼に敵！」

インカムに叫んだ時には、オリガ小隊はすでに陣地まで三分の位置にまで進出していた。

「陣地転換！」

イリーナは叫んだが、間に合いそうにない。消音装置を介さないがゆえの爆音が迫ってくる。

ロジーナとベルタがオリガ小隊に砲撃を浴びせ、牽制する。

しかしそのため陣地正面の抵抗がなくなり、すかさずファイナ小隊が突撃を開始する。

青軍主力が交通壕を移動中に、オリガ小隊は走行間射撃で激しく応射しつつ、陣地に突入した。さらにファイナ小隊が続く。

陣地に飛び込んだ智波を待ち構えていたのは、サーベルを抜いたノエミだった。ノエミは智波の姿をみとめると、勝負を挑んだ。

「前段では遅れを取ったけど、今度は私が勝たせてもらうわ」

智波も軍刀を抜いた。

「望むところです。返り討ちにして差し上げますよ！」

リリーは手近なタコツボに飛び込んだ。しかしそこには哲子が入っていた。

突然飛び込んだリリーに驚いた哲子は、着剣した九九式軽機関銃で刺突を繰り返した。

リリーはシールドを展開して防ぐが、交通壕に突き飛ばされた。

哲子はさらに追い討ちをかけ、リリーが抵抗する。

そして1分ほど揉み合ううちに、哲子に押し倒された。

哲子は手にした九五式軍刀を大上段から振り下ろす。

リリーはとっさにMG42を盾にするが、同時に、防ぎ切れない

と感じた。午前中の演習前段では、智波の刀により、いともたやすく銃身を両断されているのだ。

しかし、MG42は哲子の軍刀を受け止めた。銃身に傷が入ったが、切断されることなく、逆に哲子の九五式軍刀が折れてしまった。「これだから安物の官給品は！」

哲子は悪態を吐きつつ折れた刀を捨て、九四式拳銃を抜く。弾倉を差し込み初弾を薬室に装填すると、そのまま手近なタコツボに身を隠した。

リリーもその間に銃身が傷ついたMG42を抱え、予備の銃身に交換するために背後のタコツボに隠れた。

折れた刀身の先は、智波の鼻先をかすめ、交通壕の壁に突き刺さった。

「ちよつと哲子！ 私を殺す気！？」

智波が叫ぶと、

「文句はあんな粗悪品を作った造兵廠に言ってください！」

どこかのタコツボから哲子が言い返した。

「ヒュッ！ と音を立て、今度は折れていない刀身が智波をかすめた。ノエミのサーベルだ。」

「戦いの最中に無駄話なんて、ずいぶん余裕ね？ これが実戦なら、あなたはもう死んでいるわ」

それだけ言うと、ノエミはサーベルを鞘に収めた。もう勝負は着いたということだ。

イルゼはカテリーナを組み敷いていた。カテリーナは抵抗し、暴れるが、馬乗りになって押さえ込む。

「ベルタ！ 拳銃を取って！ 撃って！」

そばにいたベルタに向かって叫ぶと、彼女はイルゼの腰のホルスターからワルサーP38拳銃を抜き取り、カテリーナの頭に9mm模擬パラベラム弾を撃ち込んだ。

イリーナは状況を把握するために、時折タコツボから周囲を確認したり、通信に耳を傾けたりしていた。無様にも完全な乱戦となっている。こうなるとあとは個人の力量次第だ。

そこに交通壕から恵が入ってきた。

「大隊長どの、お命頂戴致します！」

恵は着剣した九九式軽機関銃を突きつける。

それに対してイリーナはスダイエフPPSh41短機関銃を向け、7.62mm模擬トカレフ弾をばらまいた。

恵は被弾したがシールドで防ぎつつ交通壕に下がる。

それを見てDP28軽機関銃を装備しておけば良かったと思った。口径は同じ7.62mmでも、PPSh41短機関銃は7.62x25弾、DP28軽機関銃は7.62x54R弾で、威力は段違いなのだ。

追撃しようと思えば追って交通壕に出ると、待ち伏せしていた恵が銃剣を突き出してきた。PPSh41短機関銃が弾かれる。

刺突を繰り返す恵に対し、イリーナはかわしながら後ろに下がっていく。

イリーナはトカレフTT33を引き抜くや、一気に弾を浴びせかけた。なにしろトカレフには安全装置がない。撃つときはあつという間だ。

たちまち恵はペンキ塗れになってしまった。

「そんなあ、飛び道具はズルいですよ」

「でも、あなただって軽機関銃を使っているでしょう？ さあ、戦死者は早く戦線離脱して」

それだけ言い残し、イリーナはその場を後にした。

「この、この、このお！ よくも小隊長を！」

レイラは円匙を振り回し、ロジーナを追いかけていた。

「うわっ！ ちょっと、ちょっと！ それ、冗談抜きでッ、危ないっ

て！！　　っていつか、カタリニコワ少尉をやったのは！　ベルタでしょ！？　責任取れベルタあゝ！！」

実は塹壕戦で最強の兵器は円匙だと言われている。力一杯振り回せば、骨をへし折るぐらいは簡単で、それどころか首を刎ねることさえできる。

「問答無用！　仇の片割れめえ！！」

「理不尽だあゝ！！」

ロジーナは全力で逃げ回った。

イリーナのもとに、ノエミとベルタが集まってきた。とりあえず司令部の体裁は回復した。

「今までに三人を撃破しました。現在の戦力比は二対一です」

ノエミの現状報告に頷きながら、イリーナは言った。

「このまま一気に押し切りましょう」

これだけの接近戦で、しかも乱戦となると、歩行脚の性能差はほとんど考慮する必要がなくなる。あとは単純に数の問題だ。

そこに、インカムからロジーナの叫び声が飛び込んできた。

「少尉どのオゝ！　ミクリナ軍曹はッ、本気で私を殺すつもりですよゝ！　助けてエエ！！」

叫びを聞いた三人は顔を見合わせた。

「この訓練は危なくないですか？　さつきはリリーからも、櫛出曹長に斬り殺されそうになった、と連絡があつたのですけど……」

「……早いところ決着を着けましょう。死人が出る前に！！」

レイラから逃げ回っているロジーナは、行く手にタチアナと銃撃戦をしているベルタを発見した。

「やった！　ベルタアゝ、責任取って生け贄になれえ！！」

「は？」

ロジーナは状況を掴めないベルタを、勢い良くレイラの前に突き飛ばした。

「小隊長の仇イ！」

「えええ！ ちょ、ちよつとオ!?」

レイラが振り下ろした円匙はベルタの顔面にぶつかった。顔に円匙の形に赤い痕が付いたベルタはそのまま気を失い、崩れ落ちる。

しかしレイラは標的をロジーナに戻し、なおも攻撃を続ける。

狭い交通壕でレイラとタチアナに挟まれたロジーナは窮地に陥った。

「仇めえ！ 覚悟オ！」

レイラが振るう円匙を、とっさに脇にあつた退避壕に飛び込んで交わす。

だがその先に逃げ場がない。

レイラはにじり寄る。

「ふふふ、悪党め、とうとう追い詰めたよ。覚悟しなさい」

その凶悪な笑みに、ロジーナは震え上がった。

いよいよ最後か。諦めかけた時だった。

「そこまでよ！」

交通壕の先からイルゼの声と、9mm模擬パラベラム弾が飛んできた。銃弾は次々にレイラに命中し、彼女の体を赤く染め上げた。

「ミクリナ軍曹、被弾。戦線離脱よ」

MP40短機関銃を構えたイルゼは、突然の出来事に呆然とするレイラに告げた。

数拍置いて事態を把握したレイラは、円匙を取り落として呟いた。

「そんな……、あと少しで、あと少しで小隊長の仇を討てたのに」

「カーチャの所に行って、謝りましょう。きつと許してくれるわ」

レイラが戦線離脱すると、ロジーナがベルタに抱きついた。

「少尉どのお！ 助かりましたあ！」

「間一髪だったけど、間に合って良かった」

「でも、ベルタが……」

「彼女のことは残念だったわ……。でも、あなただけでも無事で良かった。彼女の犠牲を無駄にしないためにも、私たちは最後まで戦

い抜きましよう」

「はい！」

決意した二人だったが、目を覚ましたベルタが声をかけた。

「ちよつと、二人とも？ 勝手に私を殺さないでくれる？」

「ベルタ！ 無事だったの！？ 良かった！」

ベルタを見てロジーナは彼女に抱きつく。

だがベルタはロジーナを振り払い、詰問した。

「何を白々しい。ロジーナ！ あなた私を盾にしたでしょ！？」

「あれは、偶然、偶然だよ！」

「ウソ！ 生け贄とか言つてたじゃない！」

「いや、それは……」

そこに銃弾が飛んできた。

交通壕の先で、タチアナが叫んだ。

「まだ戦いは終わっていないんですけどお！ 私の存在を忘れない
でくださあい！」

イルゼとロジーナは手近の退避壕やタコツボに散った。レイラに
やられたベルタは戦線離脱だ。

「ロジーナ、話はあとよ！ 別に許した訳じゃないからね！」

「はいはい」

ロジーナは適当に返事をしながら、反撃を開始した。

タコツボに隠れて激しく撃ち合った結果、哲子の九九式軽機関銃
もリリーのMG42も、弾切れになつていた。

手元にある武器といえば九四式拳銃とワルサーP38ぐらいだ。

砲は距離が近すぎ、使えない。

通信では、先ほどレイラとタチアナが撃破されたらしい。これで
残っている赤軍はひとりだけだ。

「参つたな、負け戦だ」 哲子が呟いた直後、タコツボにイリーナ
とノエミが踏み込んだ。

「これで終わりよ。投降しなさい」

イリーナに言われ、哲子は手を上げた。

第07話 演習後段（後書き）

今回は後半に私なりのコメディタッチを入れてみました。

私のセンスではあれが限界です……、いかがだったでしょうか？

レイラは育て方次第ではヤンデレになりそう……

気をつけた方が良さそうです。

哲子の軍刀ですが、初期の物を除き九五式軍刀は本物の日本刀に比べ切れ味は劣りますが、代わりに耐久性は強かったので、銃身を切ることはできなくても簡単に折れることはないはずです。

このことから哲子の九五式軍刀は、軍刀のより良い製造法を模索する中で作られた、ごく初期の粗悪品を支給されたものと思われます。

それではご意見ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3685u/>

～もうひとつの501～

2011年12月17日06時50分発行